

# 近代医療とイスラームの癒し -クウェイト社会を事例として-

著者	柳瀬 由子
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	学術(環)博第114号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/51215">http://hdl.handle.net/10097/51215</a>

氏名	やなせ ゆうこ 柳 瀬 由 子
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	学術(環)博第114号
学位授与年月日	平成21年9月1日
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項
研究科, 専攻の名称	東北大学大学院環境科学研究科(博士課程)環境科学専攻
学位論文題目	近代医療とイスラームの癒し—クウェイト社会を事例として—
指導教員	東北大学教授 藤崎 成昭
論文審査委員	主査 東北大学教授 藤崎 成昭      東北大学教授 佐竹 正夫 教授 長澤 栄治 (東京大学)

## 論文内容要旨

クウェイト政府は、潤沢な石油収入を基にして、社会福祉を充実させた。国公立の医療設備と学校を建設し続け、その医療費と教育費は国民に限って無償とした。この結果、乳幼児死亡率は激減し、平均寿命も延びて、両者の数値は先進国並みになった。また、識字率もアラブ諸国の中で際立って高い。男女問わず積極的に海外に留学させてきたことが示すように、欧米の近代的文化への知識も社会に行き渡っている。

豊富な石油収入を背景に、医療、教育が無償の他、電気、水道、電話などの公共料金も政府補助で、かなり低く抑えられている。雇用に関しても、同じく石油収入のおかげで国民のほとんどを公務員として就労させ、国民は豊かさを享受し、多くの中産階級が生まれた。

イスラームの戒律が厳しく適用されているサウジアラビアなど、近隣の湾岸アラブ諸国と比較してみても、国民の政治参加、女性の社会進出、言論の自由も広く認められている。その結果、中産階級出身の新しい政治勢力が生まれ、現在議会政治の舞台で活躍している。

宗教による規制も、サウジアラビアほど厳しくなく、宗派の相違による差別も表立っていないため、社会は安定している。そして多くのクウェイト人は、留学、ビジネスで国外の滞在経験を持つなど、異文化に接する機会は多く、映画、ファッションなど国外で流行するものは直ぐに輸入され、欧米人のような生活様式を享受している。

しかし、上に述べたような状況で、社会の近代化や西洋化が進んだとは単純に判断できない。表面的にクウェイトの社会と生活様式の変化が見られても、社会を根底で支える血縁、部族、宗派、そして出身階級による紐帯と、さらにこれら社会の諸関係の全体を大きく規制するイスラームによる規範が広範囲に亘って優先するという、その基本的構造に変

化はないのである。

また、多くの中産階級が生まれたといっても、社会的な階層格差は歴然と存在し、出自によって、その人生や、地位が決定される状況は変わらない。上昇移行の機会は平等でなく、所属する社会階層に大きく制約されるのが現実である。殊に女性の場合は顕著である。

こうしたいわば跛行的状況は、クウェイトが通常の近代化の過程を経ていないからではないかと考えられる。一般的に、伝統的社会が近代化する過程において、政治的、経済的、文化的な側面において多くの変容が余儀なくされる。従来の社会の基盤であった伝統的価値観は崩壊し、合理的理性が確立されるのである。しかし、クウェイトでは、外側は近代化を遂げたとはいっても、それは物質的なものであり、社会の基幹は石油が発見される以前と変わらぬ価値観が基礎となっているのである。この点、クウェイトは、先進国と途上国、双方の特質を備えているといえよう。

この傾向は医療においても見られる。社会が豊かになって、先進国並みに死因の多くを生活習慣病が占めるようになった。また、急激な社会変化に人々の意識が追いついていかないことも原因となり、心や精神の痛みを訴える人も増加している。

そこで政府は、近代医療の限界を感じ、近代医療以前からクウェイトに存在した伝統的民間療法をあらためて見直した。その中でも、かつて「イスラーム医学」が奨励していたとされる植物系の薬剤を使用した療法と、また、主にクウルアーンの読誦で病人の心、精神を癒してきた「シャイクによる癒し療法」を選んだ。前者は生活習慣病に、後者は、心や精神の病に適していると判断したのである。両者ともイスラームを基本とする療法である。

政府はこれら二療法を、公的な伝統的民間療法として認めた。そして、身体的な疾患には「イスラーム医学」が奨励する植物系の薬剤を研究、製造し、これを患者に投与して治療する「イスラーム医科学機構」を設立すると、生活習慣病を中心とした身体的な疾患者への治療を行わせることとなった。

「シャイクによる癒し療法」は、シャイクを国公立病院に派遣し、入院患者への心のケアとしての療法を行わせ始めたが、身体的な疾患はなくとも、心、精神を病む患者も少なくない。

これら二療法とも。国立病院と同じ扱いで治療が受けられるので、近代医療と同様に、国民は無償で受けられる。

さらに、政府はこれら二療法の存在と働きを、「近代医療と共存するイスラームを基礎とした医療」と、国内外に大きく宣伝を始めた。最近では、後者のシャイクによる癒し療法を、「スピリチュアルな療法」と謳い、さらに WHO や欧米諸国に向けてアピールしている。

このような宣伝活動を行ってはいいても、重患者は国費負担で医療先進国へ送り、治療に努めさせるなど、政府や国民ともども自国の医療向上への意識は高くない。

特に、精神的な疾患に関していえば、多くの患者が治療を求めているにも関わらず、専門家を育成する策を講じることもない。これらの病や患者に対する社会の偏見もあり、適切

な治療が受けられない人や、また、病の一步手前の状態にある人は多い。

そのため、こうした人々はシャイクによる癒し療法を求めるのである。しかし、公的医療機関でのシャイクによる、正統的イスラームに則った療法は功を奏しないのか、充足感を得られない人も少なくない。すると、彼らは有償であっても、近代医療以前から民間医療機関で行われてきた癒し療法を受け、一時でも癒しを得ることがある。

これら民間医療機関で行われる療法は、政府によって公的には認められなかったが、イスラームが基本であり、公的医療機関における療法よりもさらに患者の精神を重視する療法を行う。しかし、非イスラーム的な要素を含む場合もあるため、シャイクなど宗教に厳格な人は、これを非イスラーム的と、非難する。しかし、非イスラーム的な要素に人はイスラームの「俗」の側面を感じ、人々はここに癒しを見出すのであり、これを求める人は多いのである。

物質的な近代化は遂げたが、未だ伝統が残るクウェイト社会である。莫大な石油収入によって、国民の生活は劇的に向上し、中産階級をうみだした。そうはいつても、依然、身分格差が色濃く残るクウェイト社会で、出自がその人の人生を左右する。物質的な豊かさを享受できても、未だ人々の意識は、このような伝統とともにあり、外側の急激な変化に追いついていかないところもある。

以上に述べたようにクウェイト社会には、先進国と途上国の二面性を有する社会であり、いわば跛行性をもった社会であるといえよう。本論文では、このようなクウェイト社会の跛行性を象徴するともいえる、クウェイトの伝統的民間療法の実態を明らかにすることを目的とする。

# 論文審査結果の要旨

本論文はクウェイト社会を事例として、近代医療の定着と、それにもかかわらず根強く残り続けている伝統的民間療法（イスラームの癒し）の実態と背景を論じたものである。

クウェイトは世界でも有数の埋蔵量を有する石油資源によって急速に豊かさを獲得した。今日では、一人当たり所得では先進国並み、そして人間開発指標でもアラブ諸国の中では最も高い水準を維持している。そのクウェイト国民は、一方で20世紀に入ってから欧米人、特にアメリカのミッシヨナリーによって持ち込まれた近代医療の恩恵に浴しつつ、他方で伝統的なイスラームの癒しをも依然として求めている。イスラームの癒しには、イスラームの「聖」的な側面に依拠するものと「俗」的な側面に依拠するものの双方がある。前者は「厳格な宗教」としてのイスラームにも適うものであり、例えば政府の設立したイスラーム医科学機構で提供される療法であり、シャイク（宗教的指導者）によって施される癒し療法である。後者はとりわけスンニ派の「厳格な宗教」という立場からは「非イスラーム的」として排除の対象とされつつも、主としてイラン系住民や黒人奴隷の子孫である住民によって伝統的に執り行われてきた、例えばズィヤーラ（聖者廊参詣）やザール儀礼のような癒し療法である。

序論では、本研究の目的と課題、先行研究、研究方法、論文の構成、が述べられている。

第1章では、クウェイトにおける近代医療史が、アメリカのミッシヨナリーによる近代医療の導入の過程を中心に、詳細に論じられている。

第2章では、近代医療の導入、普及にもかかわらず、人々の間で根強く求められている伝統的民間療法の存在が議論されている。クウェイト政府自体がイスラーム医科学機構を設立しているほどである。

第3章では、未だにクウェイト人の信じ恐れるところである超自然的存在（ジン、邪視、呪術）とこれに対するイスラームの癒しが詳述される。シャイクによる癒し療法がスンニ派の厳格なイスラームの立場からも正統的とされる一方で、シーア派の宗教行事、ズィヤーラ（聖者廊参詣）、哀悼儀礼、ドゥアー（祈願ととりなし）は、特にスンニ派の厳格なイスラームの立場からは「非イスラーム的」とされつつも、根強く社会に残っている。

第4章では、イスラーム世界において広く行われてきたザール儀礼について、クウェイトの事例を中心に論じている。

第5章は結論であり、論文を総括し、イスラームの癒しの今後を展望している。

本論文は、産油国クウェイトを事例とする地域研究の成果であり、医療とイスラームの癒しという新たな視点から、クウェイト社会の一側面を明らかにするものとなっている。

よって、本論文は博士（学術）の学位論文として合格と認める。